

表-11. 植物プランクトン餌料の供給量とティラピア・ニロチカの日間増重率の間係
(昭和54年度報告より)

試験区	淡水植物プランクトン餌料区	chl-a 精算	淡水配合餌料区	日間 増重量率	50%海水植物プランクトン餌料区	chl-a 精算	日間 増重量率	50%海水配合餌料区	日間 増重量率	50%海水植物プランクトン配合餌料併用区	日間 増重量率	chl-a 精算
	5-6月	0.38	68	1.59	0.94	52	1.97					
6-7月	0.98	270	1.53	2.18	251	1.72						
7-8月				1.68	81	2.04	2.68	180				
total	0.69		1.48	1.48		1.56	2.68					

chl-a : g / 10 t / month

$$\text{日間増重量率(\%)} = \frac{W_2 - W_1}{\frac{W_1 + W_2}{2} \times \text{日数}} \times 100$$

(W_1 : 開始時魚体重
 W_2 : 終了時魚体重)

2 アイゴ類

(1) アイゴ類の植物餌料に対する選択性 (昭和53年度)

供試された植物物料は、アオノリ (*Enteromorpha*), アオサ (*Ulva*), ハネモ (*Bryopsis*), オキナワモズク (*Cladosiphon okamuranus*), ホンダワラ (*Sargassum*), サツマイモ (*Ipomaea edulis*) の若葉で、供試魚はゴマアイゴ (*Siganus guttatus*) であった。結果は次のとおり アオノリ > アオサ > オキナワモズク > ハネモ > サツマイモの葉 > ホンダワラ であった。ゴマアイゴの選択性は、ティラピア類の結果と同様にアオノリに対して強かった。

(2) アイゴの植物餌料による成長 (昭和53年度及び55年度)

昭和53年度では前試験で選択性の強かったアオノリ、アオサの2種の植物餌料を用い配合飼料給餌の場合との成長の差をゴマアイゴについて試験した。結果は図-8に示したとうりで、配合飼料では僅かに成長がみられたが、アオサ、アオノリを給餌した区ではむしろ魚体重減少の傾向となり、ティラピア類の場合と同様試験期間が約1週間と短くストレスから解放されないままの状態であったことが考えられた。